

富山県福光町  
**徳成Ⅱ遺跡Ⅰ**

2001年3月

福光町教育委員会

## 序

福光町北東部に位置する北山田南部地区は、山田川左岸の河岸段丘上に位置します。県営ほ場整備事業に伴い調査が行われ、縄文時代から中世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）の実施に伴う徳成Ⅱ遺跡の発掘調査です。当地区におけるほ場整備事業関連の遺跡発掘調査は平成10年度の試掘調査から始まり、遺跡の大半は盛土により保存し、用排水路用地及び一部の水田削平部分について本調査を実施することとなりました。今年度調査では、古代の掘立柱建物、土坑、自然流路、ピットを確認しました。また、須恵器、土師器、珠洲などの古代期の遺物が多く出土しました。本書は、その調査結果をまとめたものです。郷土の歴史解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、福光町シルバー人材センター・富山県埋蔵文化財センター・富山県農林水産部・ほ場整備事業北山田南部地区委員会をはじめ、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに対し、深く感謝するものであります。

平成13年3月

福光町教育委員会

教育長 石崎栄一

## 例　　言

1. 本書は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区に伴う富山県福光町徳成Ⅱ遺跡の発掘調査概要である。

調査は、平成12年6月12日から同年9月14日までである。調査面積は、1,000m<sup>2</sup>である。

2. 調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。

3. 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、指導文化係長森田智之、同係主事佐藤聖子が調査事務を担当し、生涯学習課長中島英一が総括した。調査担当及び本書の執筆は生涯学習課主事佐藤聖子が行った。

4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。

越前慶祐・太嶋勇・常本健治・林敏三・宮山造一・境洋子・岡本淳一郎・吉田一洋（敬称略・五十音順）

5. 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社を用いた。

6. 調査参加者は次のとおりである。

河合弘・河合文市・棚田俊雄・細木健一・溝口外雄・溝口日出夫・山田賛庄・荒井とよ  
井幡喜久子・大島笑子・河合秋子・坂井松枝・大門ソト・竹治芳子・西村えみ子・溝口あさ子  
前多静子・宮島きみ子・山田きみ子・山道文子・吉山弘子（以上、現地作業員）  
安田富子・竹治山佳里（現地調査補助及び遺物整理作業）

## 目　　次

I 位置と環境	1	第4図 徳成Ⅱ遺跡・遺構配置図	9・10
第1図 位置と周辺の遺跡	1	第5図 徳成Ⅱ遺跡1地区の遺構(1)	11
II 調査に至る経過	2	第6図 徳成Ⅱ遺跡1地区の遺構(2)	12
第1表 遺跡の概要	2	第7図 徳成Ⅱ遺跡1地区の遺構(3)	13
第2図 遺跡の範囲と調査区位置図	3	第8図 徳成Ⅱ遺跡1地区の遺構(4)	14
III 調査の概要	4	第9図 徳成Ⅱ遺跡出土遺物(1)	15
1. 調査の経過	4	第10図 徳成Ⅱ遺跡出土遺物(2)	16
2. 調査の方法	4	第11図 徳成Ⅱ遺跡出土遺物(3)	17
3. 1地区の概要	4	第12図 徳成Ⅱ遺跡出土遺物(4)	18
IV まとめ	8	図版1～4 1地区的遺構(1)～(4)	
参考文献	8	図版5～8 1地区的遺物(1)～(4)	
		報告書抄録	

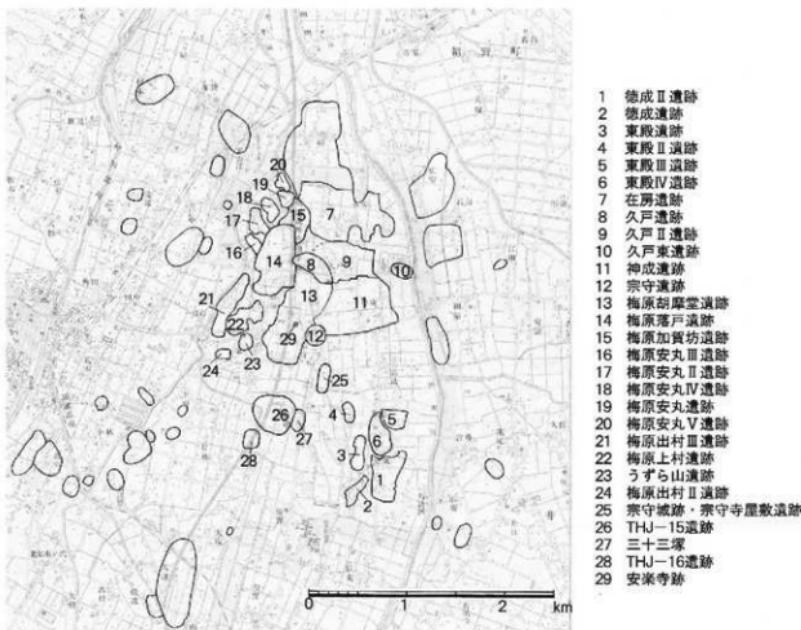
## I 位置と環境

富山県福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部端に位置する。町の西側から南側にかけては、養老三年（719年）、泰澄大師によって開山されたといわれる靈峰医王山をはじめとするなだらかな山脈が連なる。上平村と接する南側に位置する大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

徳成Ⅱ遺跡は、小矢部川の支流である山田川左岸、河岸段丘上に位置する。標高約92、93mを測る当遺跡の周囲には、徳成遺跡、東殿遺跡、東殿Ⅱ遺跡、東殿Ⅲ遺跡、東殿Ⅳ遺跡が存在する。縄文時代の遺跡には、徳成遺跡（中・後期）をはじめ、東殿遺跡で石棺の出土があるほか、試掘調査によって東殿Ⅲ遺跡からは後期後半にあたる焼土、石組炉が確認されている。さらにその周辺には、北側にうずら山遺跡（前期）、宗守遺跡（中期）、西側には竹林Ⅰ遺跡、竹林Ⅱ遺跡（中・後期）、東側山田川右岸には縄文晚期井戸式の指標となる井戸遺跡が存在する。

弥生、古墳時代には、徳成Ⅱ遺跡より堅穴住居と考えられる落込みと高杯が出土している。北側の梅原地区からは、梅原胡摩堂遺跡より中期の土器・管玉・石鏡が出土し、梅原安丸Ⅲ遺跡では、古墳時代の堅穴住居跡1棟を検出している。古代では、在房遺跡の本調査により掘立柱建物群が確認されている。また、文献資料によると、福光町の一部が砺波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ばれ官倉がおかれていた事が知られる。

中世期には、県内中世集落の指標ともなる梅原胡摩堂遺跡が、東海北陸道自動車道建設、県営は場整備事業に伴い発見されている。このように、北山山南部地区周辺では、連續と人々が生活を続けていたことがわかる。



第1図 位置と周辺の遺跡 (S=1:50,000)

## II 調査に至る経過

平成8年（1996年）、徳成・東殿・利波河の3地区を含む北山田南部地区において、県営は場整備事業（担い手育成型）実施の計画が策定された。この事業は、北山田南部地区95haを対象とし、平成9年度より14年を事業実施年とあてていた。しかし、対象地内には周知の遺跡として縄文時代中・後期の徳成遺跡、縄文時代石槍が出土している東殿遺跡が存在していたこと、同じく河岸段丘上に位置する北側の梅原地区では、縄文時代から中世まで多数の遺跡が確認されていたことから、対象地区内にも遺跡が存在することが予想された。のことから、町教育委員会では、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受け、平成8年12月に分布調査を実施したところ、遺物の散布を確認し、対象地区内に新たに4つの遺跡が存在する事がわかった。

町教育委員会では、遺物の散布が認められた部分において、平成10年から国庫補助金をうけて試掘調査を実施している。バックフォウによって、田に何箇所か筋掘りをし、地山が検出できるまで掘り下げ、遺物包含層及び遺構の有無、遺跡の遺存高を標高で確認するといった作業を行ったところ、現在まで調査が終了した箇所の遺跡の遺存状況は良好であった。このことから、遺跡の保護措置について、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と協議し、遺跡が存在する箇所については、は場整備工事施工に際しては盛土を行う事で水田下に保存し、一部の面工事、農道建設、用排水路着工部分について本調査を実施する事となった。試掘調査は継続中であり、本調査に着手したのは今年度がはじめてである。これまでの調査面積、遺跡の内容は次のとおりである。

第1表 調査経過

年 度	試掘調査対象面積	本調査面積	調査対象遺跡
平成10年度	3. 69ha	—	徳成II遺跡
平成11年度	6. 28ha	—	徳成遺跡
	8. 13ha	—	徳成II遺跡
	5. 77ha	—	東殿III遺跡
	1. 27ha	—	東殿IV遺跡
平成12年度	—	1, 000m <sup>2</sup>	徳成II遺跡

第2表 遺跡の概要（NO. は第1図の遺跡番号と対応する）

NO.	遺跡名	所属時代	検出遺構	出土遺物
1	徳成II遺跡	古墳時代・縄文・縄文後期後半・古代・中世・近世以降	土坑（住居？）・溝・ピット	土師器・須恵器・中世土師器・青磁・越前・陶磁器
2	徳成遺跡	縄文中期～後期・古代・中世・近世以降	土坑・溝・ピット	縄文土器・須恵器・中世土師器・陶磁器
3	東殿遺跡	縄文・中世	※未調査	
4	東殿II遺跡	古代	※未調査	
5	東殿III遺跡	縄文後期後半・古代・中世・近代・近世以降	土坑・溝・ピット・溝（旧用水）・焼土塊・炉跡	縄文土器・土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前・陶磁器
6	東殿IV遺跡	古代・中世・近代	土坑・溝・ピット・溝（旧用水）	土師器・須恵器・中世土師器・銅貨



第2図 遺跡範囲と調査区位置図 (S=1:5,000)

### III 調査の概要

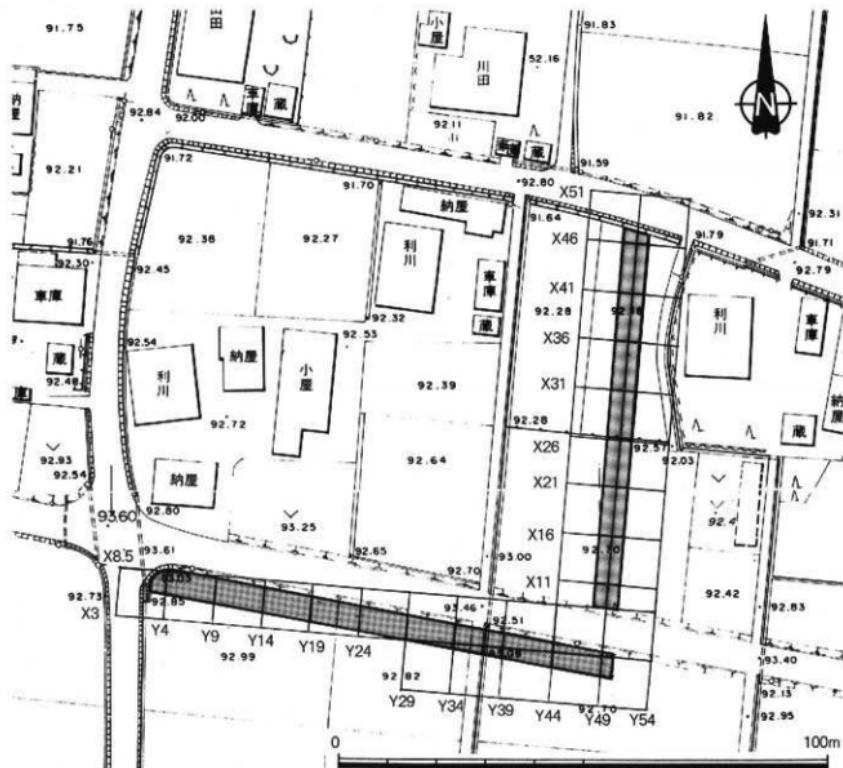
## 1. 調査の経過

12年度本発掘調査は、遺跡中央南寄り部分、排水路新規着工工事に伴う1地区：1,000m<sup>2</sup>部分である。北山田南部地区において、また徳成Ⅱ遺跡においても、本調査に着手するのは今回がはじめてである。

## 2. 調査の方法

調査は、まず重機で耕土などの無遺物層の除去を行い、その後調査区に合わせおおよその東西南北の方向に合わせ、基準杭を10mごとに設置し、調査区割を行った。区割は、南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層掘削・遺構検出・遺構掘削等は調査員及び作業員が行い、土層図・出土状況図の作成は調査員及び調査補助員が担当し、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリコプターにより撮影した写真から図化した。



第3図 調査区割 (S=1:1,000)

### 3. 1地区の概要

#### (1) 地形と層序

調査区は、町道高宮利波河線を挟んで南側に5m幅、東西方向約100m、北側に5m幅、南北方向約100mを設定している。1地区が存在する周辺の地形は、南から北に緩やかに傾斜している。標高は、南側の低い箇所で92.18m、北側の高い箇所で92.99mである。

地表から地山面までの深さは約40cm～60cmであり、箇所にもよるがその間は大きく5層に分かれている。1層は現代の耕作土、2層は灰褐色土で盛土、3層は黒褐色土に地山上が混ざるかく乱層、4層は黒褐色土、5層は灰褐色粘土であり、4、5層は古代の遺物が含まれる。地山土は黄褐色土で、箇所により粘土質となる。

#### (2) 遺構

古代の掘立柱建物、土坑、ピット、溝、近代の溝がある。

##### A. 古代

###### SB01（第8図・図版3）

町道南側の調査区、町道よりに位置する。南側が町道下にかかるため、全容はわからないが東西南北とも2間以上の建物と考えられる。検出された部分だけをみると、床面積は12m<sup>2</sup>である。棟方向は、北に対し約3°西へ振れる。柱穴の掘り方は、約60cm前後の方形に近い形を呈している。深さは、約30cmである。埋土は、灰褐色粘土である。出土遺物より、建物の時期は9世紀中頃にあたる。

###### SK01（第6図・図版2）

町道南側調査区、西端に位置する。南北方向5m以上×東西方向約4m、深さ45cmである。土坑の方向は、北に対して15°西に振れる。埋土は、黒褐色土に地山土が混じっているものが大半を占め、底面近くには、黒褐色土が帯状にめぐっている。壁の立ち上がりは急で、床面は平坦である。床面には鉄分の沈着が激しい。出土遺物には、須恵器、土師器があるが、詳細な時期は不明である。

###### SK05（第5図・図版6）

町道北側調査区、中央X15に位置する。南北70cm×東西110cm、深さ30cmの、楕円形の土坑である。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒褐色土で、炭や鉄分の混じりが多い。須恵器・杯、杯蓋、土師器・内黒釉の底部が出土しており、これらの遺物から、遺構の時期は9世紀初頭と考えられる。

###### SK07（第5図）

町道北側調査区、中央X16、SK05の北側1mに位置する。南北約100cm×東西100cm、深さ約50cmで、SK05と同じく楕円形の土坑である。壁の立ち上がりはやや急で、床面はやや丸みを帯びている。埋土も、SK05とはほぼ同一であるが、炭の混じりは確認されなかった。須恵器・杯蓋が出土しており、時期もSK05と同一の9世紀初頭と考えられる。

###### SK12（第7図・図版4）

町道北側調査区、中央寄りX19に位置する。一辺約70cm、深さ6cmの方形土坑である。浅いため、壁と床面の区別がほとんどなく、床面は平坦である。埋土は黒褐色土で、焼土、炭が大量に混じる。また壁には、白色粘土を1cmの厚さで貼りめぐらしている。須恵器・杯蓋、土師器・甕は出土しており、それらから遺構の時期は8世紀後半から9世紀にあたると考えられる。

### **SK13（第7図・図版4）**

町道北側調査区、中央寄りX20、SK12の北側60cmに位置する。一辺約60cm、深さ約8cmの方形土坑であり、壁の立ち上がりが緩やかで、床が平坦と、SK12と形態がよく似ている。埋土もSK12と同じく、黒褐色土に焼土、炭が大量に混じるうえに、床面が被熱しているようである。出土遺物には8世紀後半から9世紀初頭の須恵器・杯蓋がある。

### **SK15（第7図）**

町道北側調査区、中央寄り、X19に位置する。一辺約120cm、深さ約40cmの丸形に近い土坑である。壁の立ち上がりはやや急で、床面はほぼ平坦である。埋土には、黒褐色土に地山土、橙色土が大量に混じる。土師器片が大量に出土したが、時期を特定できるものを確認できなかった。この土坑以外の箇所において、火を使ったなんらかの作業をした後、廃棄された廃棄物と考えられる。

### **SK16（第8図）**

町道北側調査区、中央やや北寄り、X26に位置する。一辺約70cm、深さ約40cmの方形土坑である。壁の立ち上がりは、ほぼ直立で、床面は平坦に近い。黒褐色土に地山土が混じり、鉄分も混じる埋土である。時期は不明である。

### **SK23（第8図）**

町道北側調査区、中央やや北寄りのSK16の西側1.2mに位置する。一辺約90cm、深さ40～50cmの方形土坑である。壁、床面の形態も、SK16とよく似ている。埋土には、SK16のものにさらに焼土と炭が混じるため、これも廃棄土坑ではないかと考えられる。時期もSK16と同じく不明である。

### **SD04（第8図・図版2）**

町道南側調査区、やや東より、Y30～35に位置する。大部分が町道下にあたるため、全容はわからないが、周溝となる可能性も考えられる。幅約60cm、深さ約15cmにあたる。埋土は、オリーブ褐色土の砂層であり、地山土との判別がつきにくい。須恵器・壺の体部破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

### **SD05（第8図・図版2）**

町道南側調査区、東より、Y42～45に位置する。幅2m、深さ約40cmであり、南東から北西方向へ流れていたようである。埋土は灰褐色粘土、オリーブ褐色砂層であり、砂層からは古代期の須恵器、土師器が大量に出土している。出土遺物から、時期は8世紀末から9世紀前半にあたる。

### **SD06（図版3）**

町道北側調査区、やや南より、X11～14に位置する。幅4.5m、深さ約30cmである。埋土は灰褐色粘土で、地山土が青灰色粘土となる。ここからも、須恵器・杯、杯蓋、土師器・甕、鍋などが大量に出土している。時期は、9世紀前半にあたる。

### **SX01（第6図・図版4）**

町道北側調査区、中央、X22～25に位置する。南北7m以上×東西4m以上、深さ40～50cmを測る。壁の立ち上がりは急で、床面は平坦である。埋土は、黒褐色土に地山土がブロック状に混じり、床面付近は黒褐色土がめぐる。SK01と形態がよく似ている。西側の壁には、焼土、白色粘土、が確認できるが、この土坑の用途自体は不明である。

須恵器、土師器等の遺物が大量に出土したが、前述の混合土からのものであり、時期も特定できない。

### (3) 遺物

古代、中世のものが整理箱で20箱ある。

#### A. 古代

##### SB01 (1~5)

1は、須恵器・杯Aである。口径13cm、器高3.4cm、底径7.4cmを測る。器壁が2~3mmと非常に薄く、もろい。底部はヘラきりで、体部はやや外に向かって広がる。2は、土師器内黒の椀である。口径約15.2cm、器高4.3cm、底径6cmで、底部は回転糸きりである。体部外面には漆が付着した跡があり、文字のようにも見えるが不明である。3・4は、土師器皿である。口径13.2cm・13.8cm、器高3.1cm・2.4cm、底径4.8cm・6.4cmを測る。3は内黒であり、高い高台を持つ。4の底部は回転糸きりによって切り離されている。5も、須恵器・杯Aである。口径12cmを測る。口縁部内面には墨の付着があり、転用して硯として使用されたとみられる。

1~5はすべて、9世紀中頃にあたる。

##### SK05 (6~8)

6~8は須恵器である。6は口径10.2cm、器高4.3cm、底径6.2cmを測る杯Bである。体部はやや外反する。7・8は杯蓋である。口径19.6cm・15.6cm、器高3.3cm・2.3cmを測る。

6から8ともに、9世紀初めから中頃にあたる。

##### SK07・09・11~13・19・20 (9~15・17)

9 (SK11)・10 (SK07)・12 (SK12)は須恵器・杯蓋である。ともに9世紀初めにあたる。口径12.2cm・12cm・17.2cm、器高2.1cm (10)・2.9cm (12)を測る。11 (SK09)は須恵器・杯Bである。体部はやや外反する。口径11.2cm、器高4.3cm、底径6.6cmである。9世紀中頃にあたる。14 (SK13)・15 (SK19)は須恵器・杯蓋である。口径15cm・12.4cm、器高2.8cm・2.15cmを測る。ともに焼成状態が悪く、14は黄褐色、15は乳白色を呈している。8世紀末から9世紀初めにあたる。

13 (SK12)・17 (SK20)は土師器・壺である。13は口径24cmを測る。外面はハケの後なで消し、内面はハケ目を施した後、カキ目を施している。8世紀後半にあたるのではないだろうか。17は口径9cmを測る。内外面にはけ日を施し、内面はその後なで消したか摩滅したようである。8世紀末にあたる。

##### SX01 (16)

土師器・壺である。外面には、強いけ日が施される。口径24cmを測る。

##### SD05 (18~33)

18~23は須恵器、28~33は土師器である。18は杯Aで、体部は外反し底面はヘラけずりである。口径11.4cm、器高2.7cm、底径6cmである。19から23は杯Bである。口径5~8cm、器高4.1cm~7cm以上、底径4~6cmを測る。24~27は杯蓋である。24はつまみ周辺部分しか残存していない。25~27はそれぞれ、口径11.4cm・16cm・12cm、器高3.1cm (25)を測る。27は内面中央寄りに墨書により「央」の字が確認できる。

28、29は椀である。それぞれ、口径約12cm、器高3.7~4cm、底径4~5cmを測る。30、31は高台つきの皿であり、32、33は皿の口縁部である。30は、口径13cm、器高は残存状況から、2.3cm以上を測る。33は底部のみであり、底径は6cmを測る。32、33はそれぞれ口径約7cmを測る。

すべて、8世紀末から9世紀初頭にあたると考えられる。

#### SD06 (34~47)

34から41は須恵器、42~47は土師器である。9世紀初めから前半にあたる。  
34・35は杯Aである。ともに底面はヘラきりである。口径10.6cm・12cm、器高3.4cm・3.4cm、底径6cm・8cmを測る。36・37は杯Bである。口径14.2cm・15cm、器高6.2cm・4.5cm、底径7.6cm・9.4cmを測る。38~41は杯蓋である。38、39はつまみ部分まで残存しているが、40、41は欠けている。38、39はそれぞれ、口径12.4cm・11.2cm、器高2cm・2.7cmを測る。焼成状態が悪く、胎土は乳白色を呈している。40、41は口径13cm・14cm、器高1.9cm・3.2cm以上を測る。

42・43は甕の口縁部である。口径26cm・18.6cmである。42の口縁部は外反し、43は直立する44は甕の体部である。外面はケズリ、内面はタタキのちنانで消している。45~47は甕の底部である。底径は6.4~10cmである。

#### 包含層 (48~62)

48から58は須恵器、59から62は土師器である。8世紀末から9世紀初めにあたる。  
48から50は杯Aである。それぞれ、口径12.7cm・12.1cm・11.6cm、器高2.6cm・3.2cm・3cm、底径9cm・7cm・8cmを測る。3固体とも口縁部は緩やかに外反し、50には、口縁部内面に漆の付着物がある。51~53は杯Bである。口径14.7cm・13.5cm、器高5cm・4.1cm、底径9cm・8cm・5cmを測る。53の底部外面には、墨書きが施されているが、不明である。54、55は杯蓋である。口径12.4cm・12cm、器高2.8cm・1.7cmを測る。55の外面には、自然釉がかかっている。56は甕の体部部分である。外面にタタキ目が確認できる。

59は椀、60は皿、61は高杯の脚部、62は甕である。59、60は口径12cm・14cm、器高3.7cm(59)を測る。

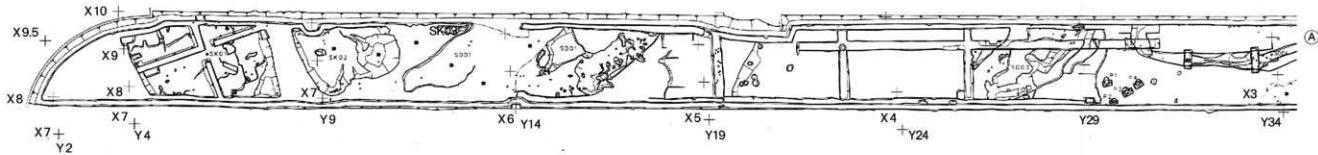
62は、口径27cmを測る。口縁部は外反し、外面はなで消し内面はハケメのあとなどで消している。

## IV まとめ

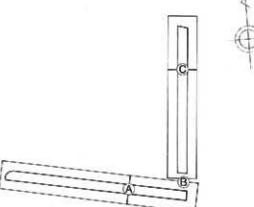
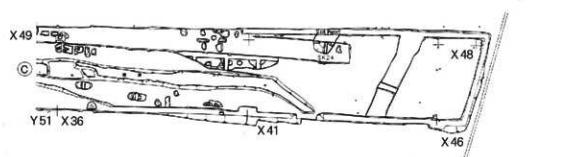
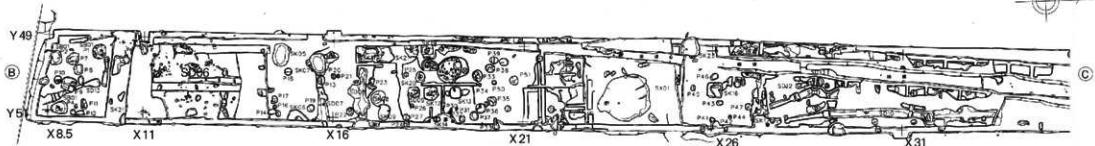
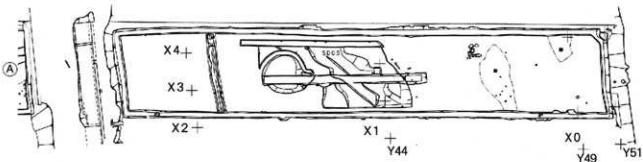
- 町道南側調査区では、近代以降のかく乱をうけている箇所が多く、遺構の密度は薄い。しかし、墨書き土器が出土したSD05、周溝とみられるSD04など、近辺に古代期の集落、もしくは館があった可能性を思わせる遺構が確認できた。
- 町道北側調査区では、遺構の密度が濃く、また遺物の出土量も多かった。ただ、SX01、SK12、SK13など焼土や炭を大量に含む遺構を多く検出したものの、その箇所では火を使った形跡が無く、その用途を特定するに至らなかった。今後の調査の成果を待って、本遺跡の内容を明らかにしていきたい。

## 参考文献

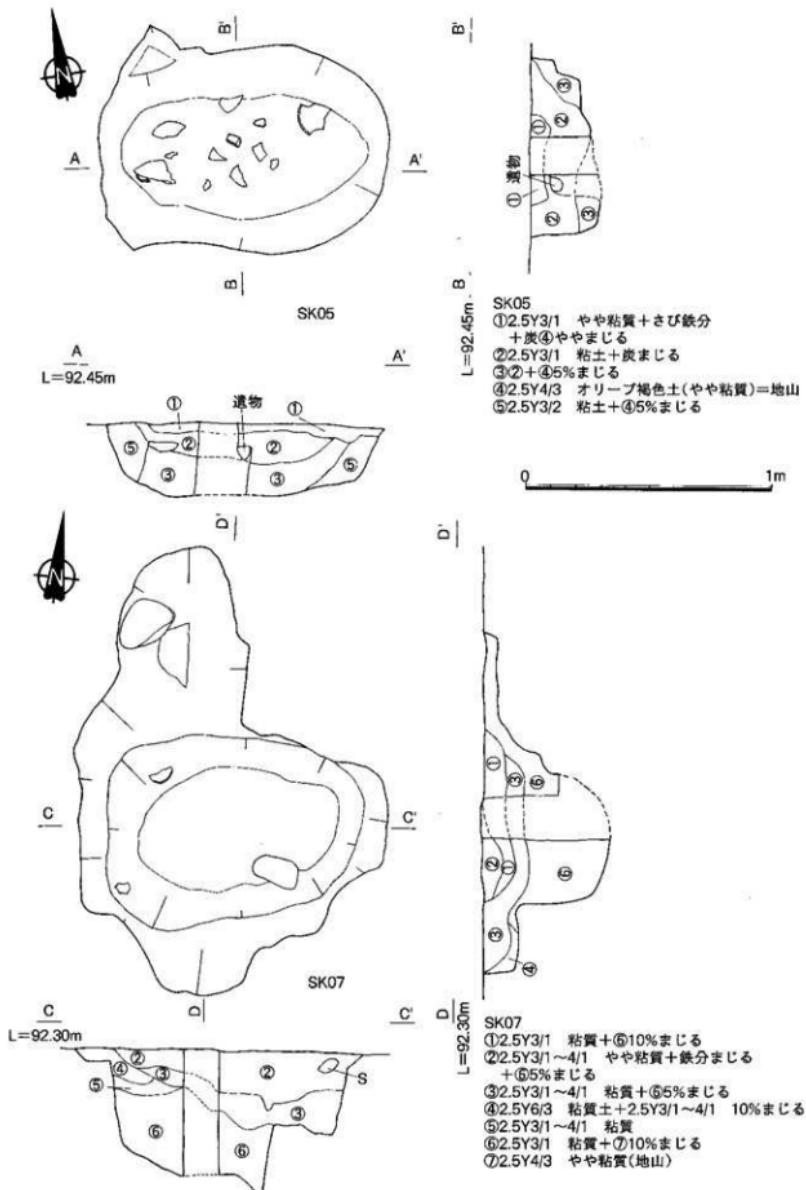
- 財団法人 富山県文化振興財団1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』  
財団法人 富山県文化振興財団1998『五社遺跡発掘調査報告』  
－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』  
富山県埋蔵文化財センター1991『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』  
福光町教育委員会1999『富山県福光町梅原胡摩堂遺跡Ⅲ 梅原出村遺跡群Ⅲ』



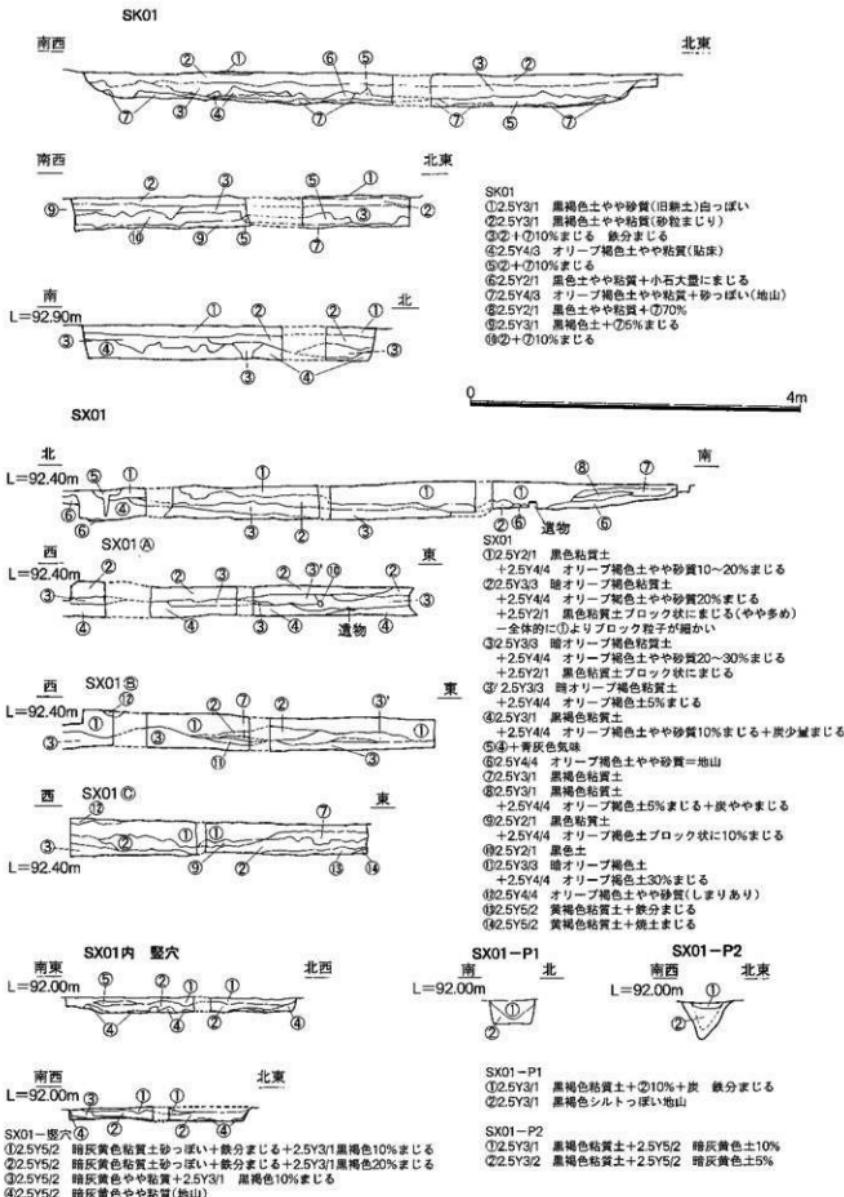
(A)



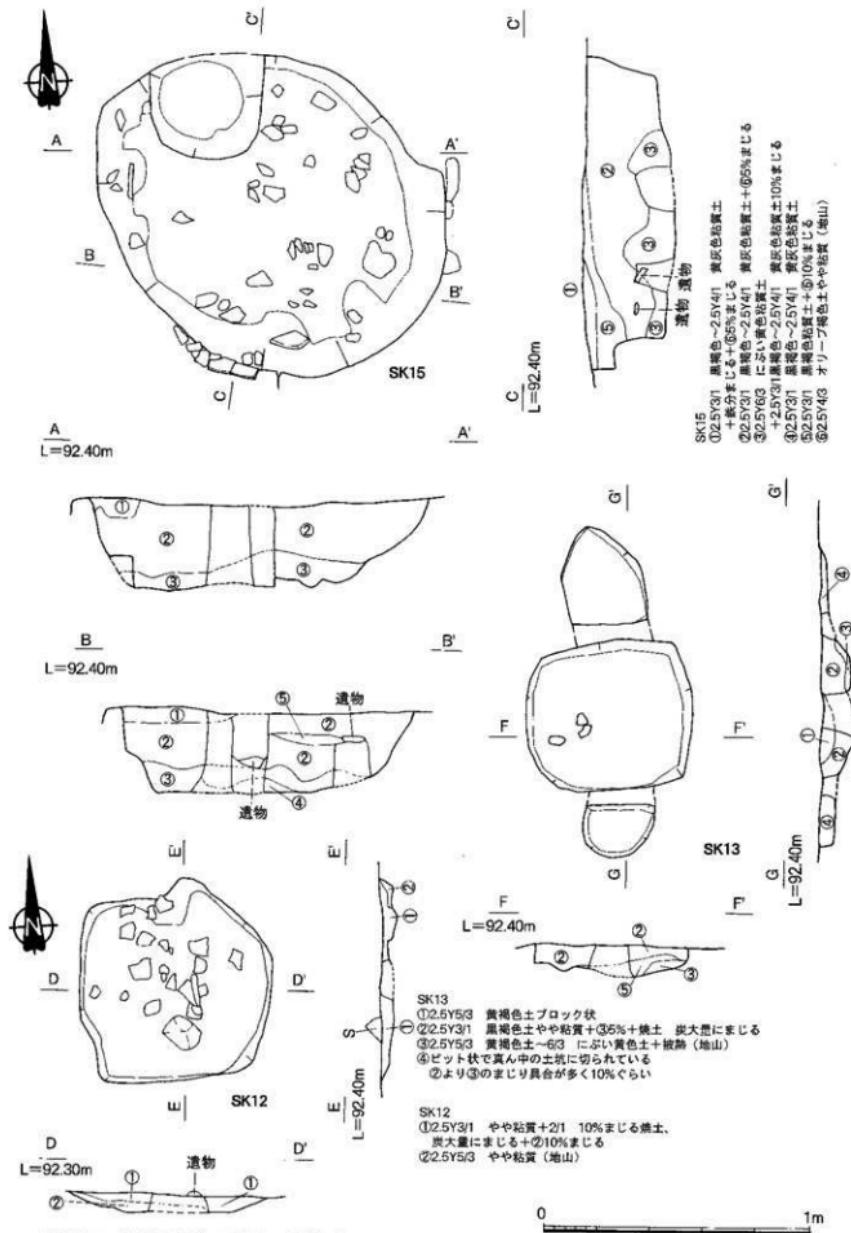
第4图 德成II遗址1地区遗迹遗物配置图 (1:200)



第5図 德成II遺跡1地区の遺構(1) SK05, SK07(1:20)

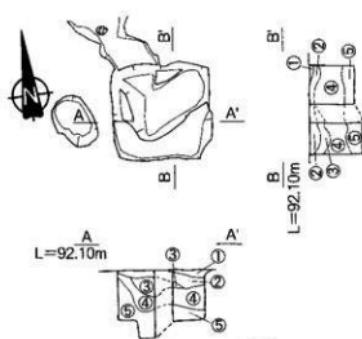


第6図 德成Ⅱ遺跡1地区の遺構(2) SK01, SX01 (1:60)

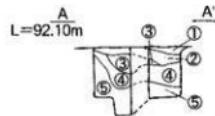
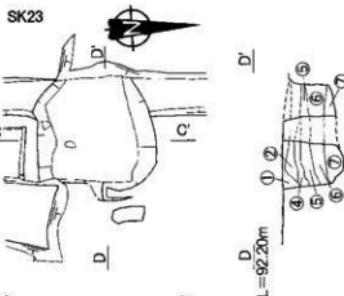


第7図 德成II遺跡1地区の遺構(3) SK15, SK12, SK13 (1:20)

SK16



SK23

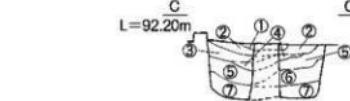


**SK16**

- ①2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- +2.5Y5/2 暗灰黄色土10%+鉄分まじる
- ②2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- +2.5Y5/2 暗灰黄色土20%+鉄分まじる
- ③2.5Y5/2 暗灰黄色土
- +2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- ④2.5Y3/1 黒褐色粘質土5%+鉄分まじる
- ⑤2.5Y5/2 暗灰黄色土5%+鉄分まじる
- ⑥2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- +2.5Y5/2 暗灰黄色土10%+鉄分まじる



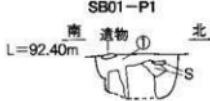
SK16



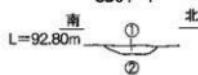
**SK23**

- ①青灰色粘土 (暗渠の埋め土)
- ②2.5Y3/1 黒褐色やや粘質土+焼けた土+灰まじる
- ③2.5Y3/3 青オリーブ褐色土+焼土+灰まじる
- ④2.5Y4/4 オリーブ褐色土やや粘質
- ⑤2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- +2.5Y4/4 オリーブ褐色土10%まじる+灰少
- ⑥2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- +2.5Y4/4 オリーブ褐色土5%
- ⑦2.5Y3/1 黒褐色粘土
- +2.5Y4/4 オリーブ褐色土10%まじる

SB01-P1



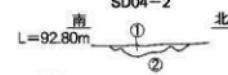
SD04-1



**SD04**

- ①2.5Y4/4 オリーブ褐色砂層
- ②2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(地山)

SD04-2



**SD01**

- ①2.5Y3/1 黒褐色粘質土+2.5Y5/2 暗灰黄色土10%まじる(やや灰色味)
- ②2.5Y3/1 黑褐色粘質土+鉄分まじる
- ③2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土=地山

SD05



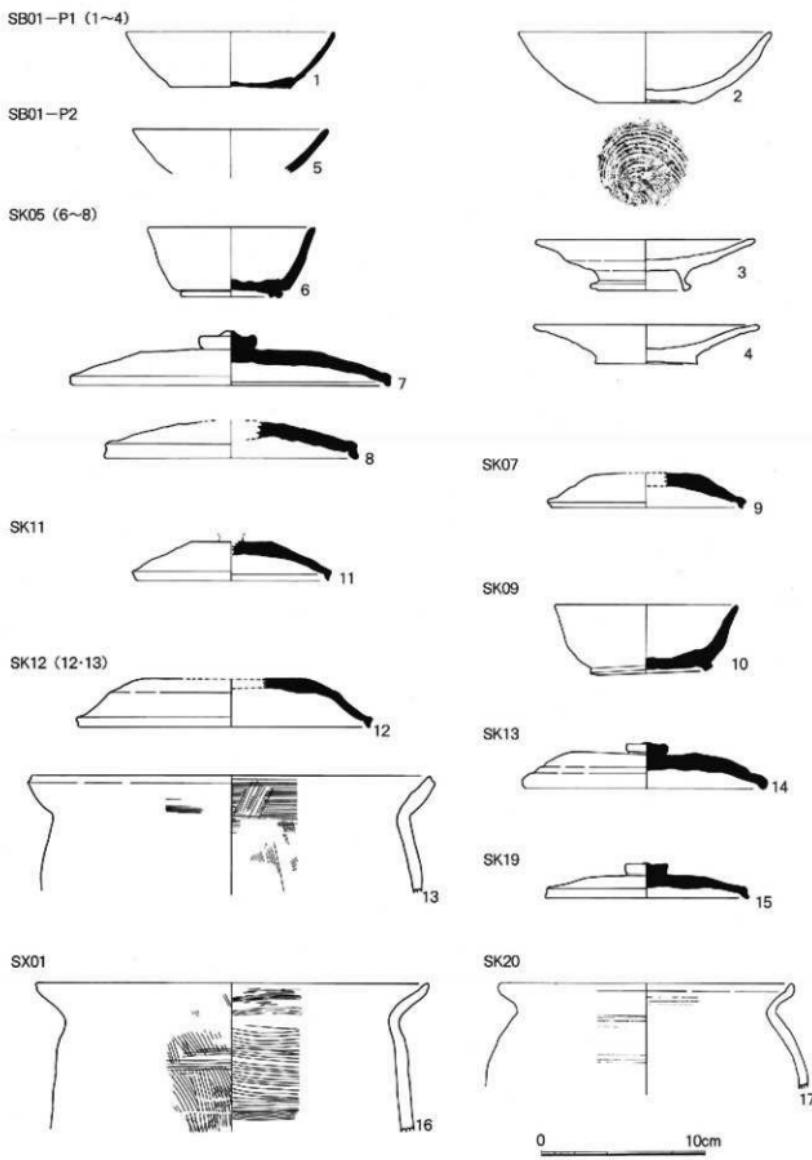
**SD05**

- ①2.5Y3/1 黒褐色粘土 鉄分まじり+白っぽい
- ②2.5Y5/2 暗灰黄色粘土 鉄分まじり+青味
- ③2.5Y5/1 暗黄色粘質土 鉄分まじり(古代の洗路の上を切っている)
- ④=①
- ⑤2.5Y4/2 暗灰黄色砂層(砂粒2.3ミリ)

- ⑥2.5Y4/4 オリーブ褐色砂層
- ⑦2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトっぽい(地山)
- ⑧2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土 鉄分多い(地山)
- ⑨2.5Y4/2 暗灰黄色砂層(⑤より粒子が細かい)

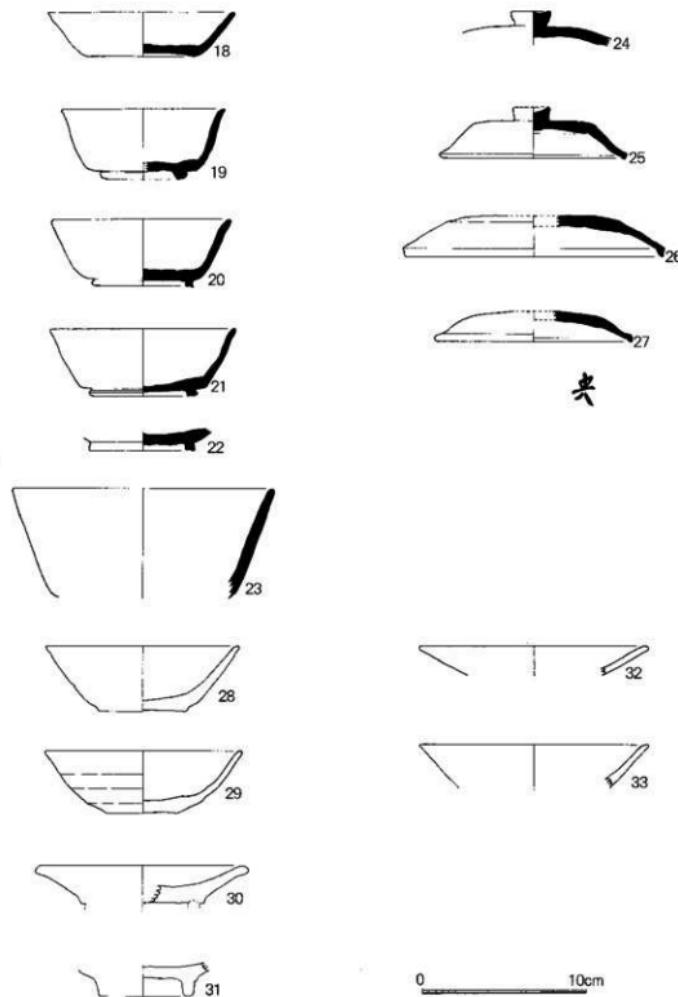
0 4m

第8図 德成Ⅱ遺跡1地区の遺構(4) SK16, SK23, SB01 (1:20), SD04, SD05 (1:60)



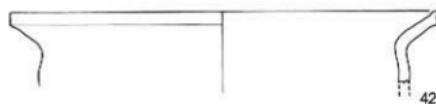
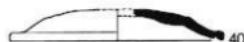
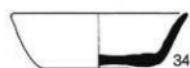
第9図 德成II遺跡 出土遺物(1) (1:3)

SD05 (18~33)



第10図 德成II遺跡 出土遺物(2) (1:3)

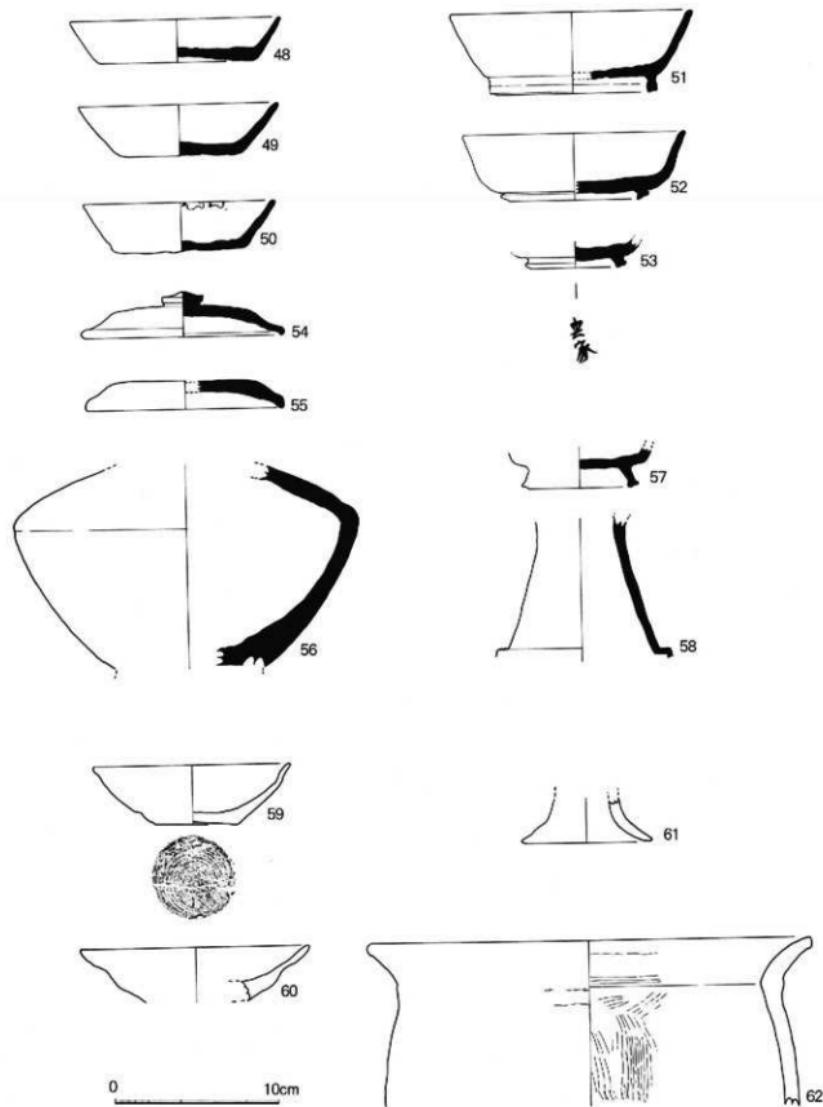
SD06(34~47)



0 10cm

第11図 德成Ⅱ遺跡出土遺物(3) (1:3)

包含層(48~62)



第12図 德成Ⅱ遺跡 出土遺物(4) (1:3)



①



②



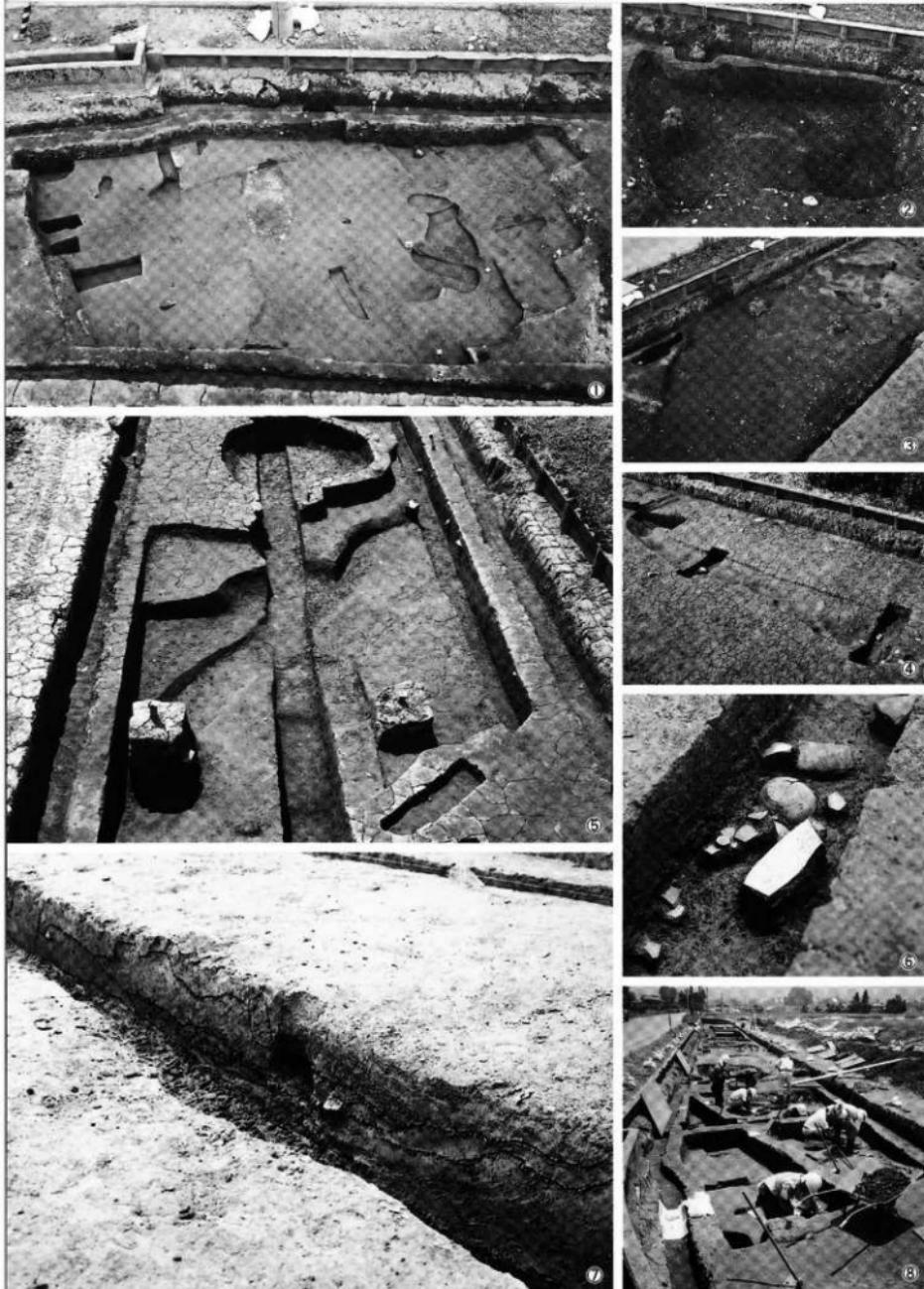
③

図版1 検出遺構(1)

① 調査区遠景（東から）

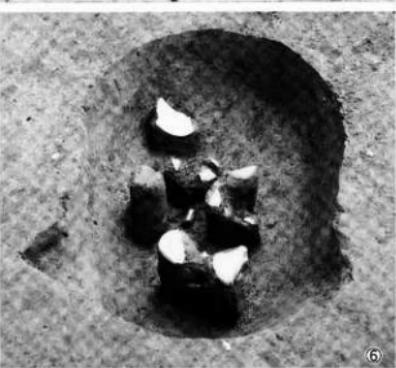
② Y4~Y49部分（西から）

③ Y4~Y49部分（東から）



図版2 検出遺構(2)

- |              |              |               |              |
|--------------|--------------|---------------|--------------|
| ① SK01 (南から) | ② SK02 (南から) | ③ SD01 (南西から) | ④ SD04 (南から) |
| ⑤ SD05 (東から) | ⑥ SD05遺物出土状況 | ⑦ SD05土層      | ⑧ 作業状況       |

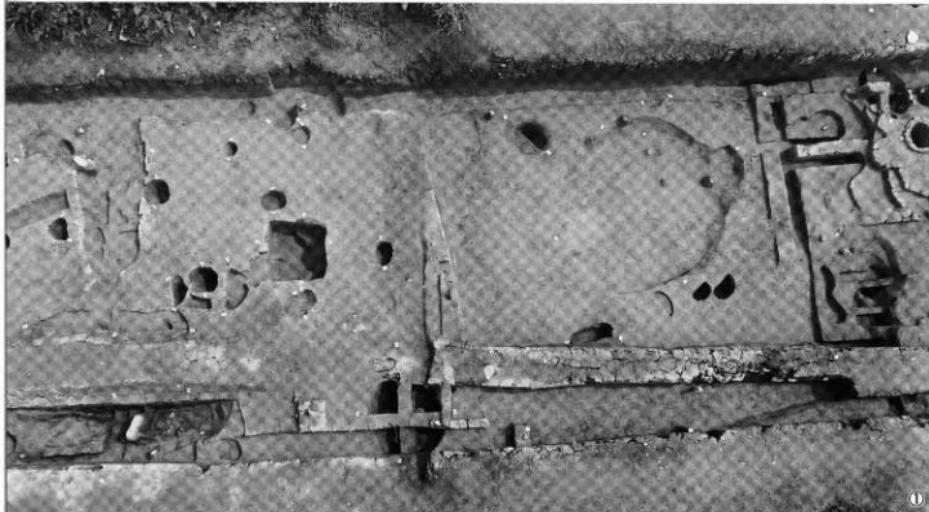


図版3 掘出遺構(3)

① X8.5～X48部分（南から）  
④ SB01-P1（東から）

② X8.5～X26部分（南から）  
⑤ SD05（東から）

③ SB01（東から）  
⑥ SD05（西から）

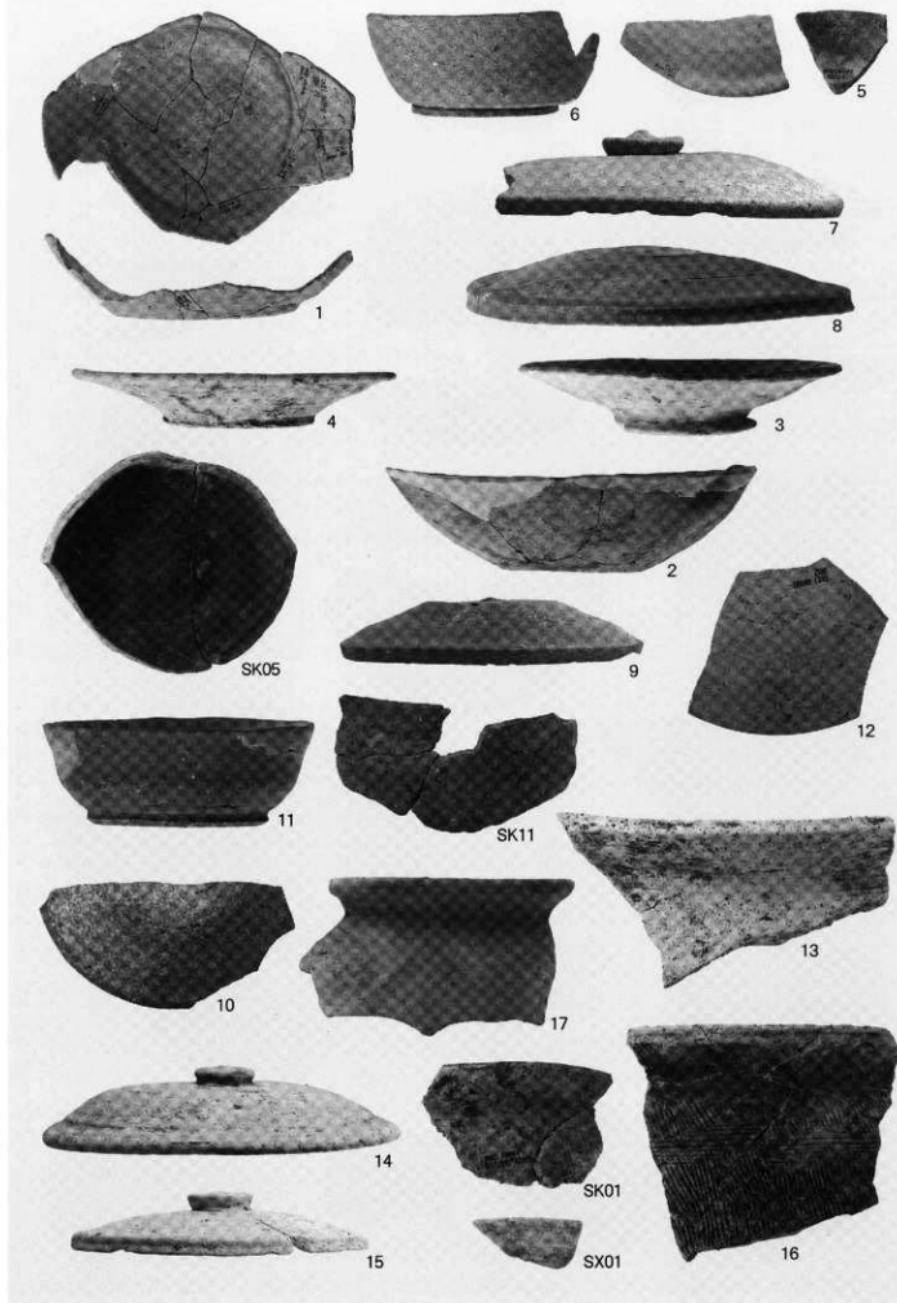


図版4 検出造構(4)

① SX01  
④ SX01土層堆積状況

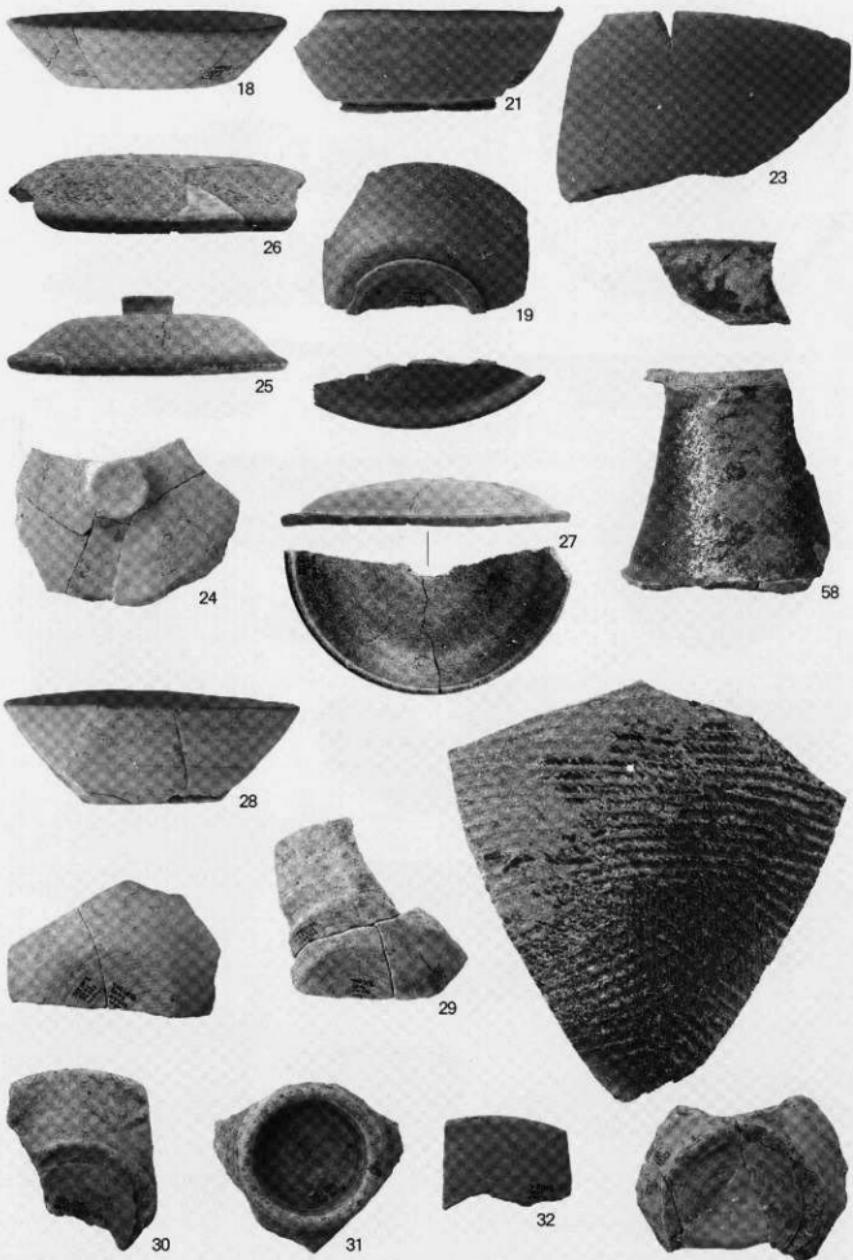
② SX01土層堆積状況  
⑤ 空操作業状況

③ SK12遺物出土状況  
⑥ 調査參加者



圖版5 出土遺物(1) (S = 1/2)

1~8: SB01, 9~15·17: : SK, 16: SX01



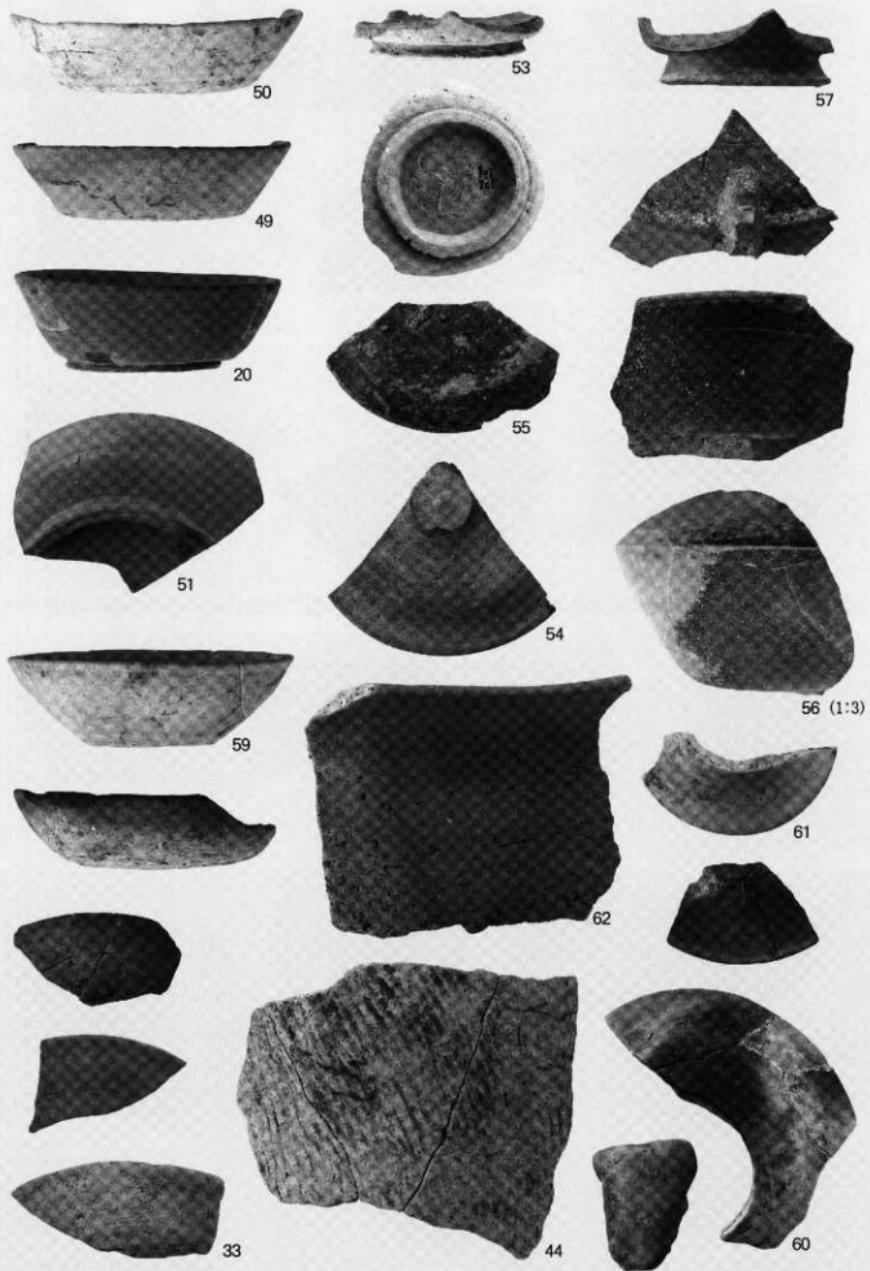
図版6 出土遺物(2) (S = 1/2)

すべてSD05



図版7 出土遺物(3) (S = 1/2)

すべてSD06



図版8 出土遺物(4) (S = 1 / 2)

すべて包含層

## 報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまちとくなりにいせきいち							
書名	富山県福光町徳成Ⅱ遺跡I							
副書名	県営は場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)							
編著者名	佐藤聖子							
編集機関	福光町教育委員会							
所在地	〒939-1692 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TEL (0763)52 1111							
発行年月日	西暦2001年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
とく 徳成Ⅱ	とやまけん 富山県 ふくみつまちとくひ 福光町徳成	16421	274	36度32分 31秒	136度54分 53秒	000612 ～ 000914	1,000m <sup>2</sup>	県営は場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
徳成Ⅱ	集落	古代	掘建柱建物、土坑、溝、ピット	須恵器、土師器				
		中世		珠洲				

県営は場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区  
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(1)

### 富山県福光町徳成Ⅱ遺跡I

平成13年3月

編集 福光町教育委員会

発行 福光町教育委員会

印刷 (株)ナカダ印刷

